

群 教 七	G05 - 07
	平26.254集
	図画工作

色や形などを手掛かりに想像を働かせ、作品を 多様な見方や感じ方で味わうことができる児童の育成 — 視点を意識することを柱とした鑑賞活動を通して —

特別研修員 町田 和弘

I 研究テーマ設定の理由

はばたく群馬の指導プランには、群馬県の図画工作科の課題として「形や色に着目して感じ取ること」とあり、鑑賞の能力を高める指導の充実が求められている。その中で高学年では、解決に向けて伸ばしたい資質・能力として「作品などのよさや美しさを感じ取ることができる」ことを重視している。

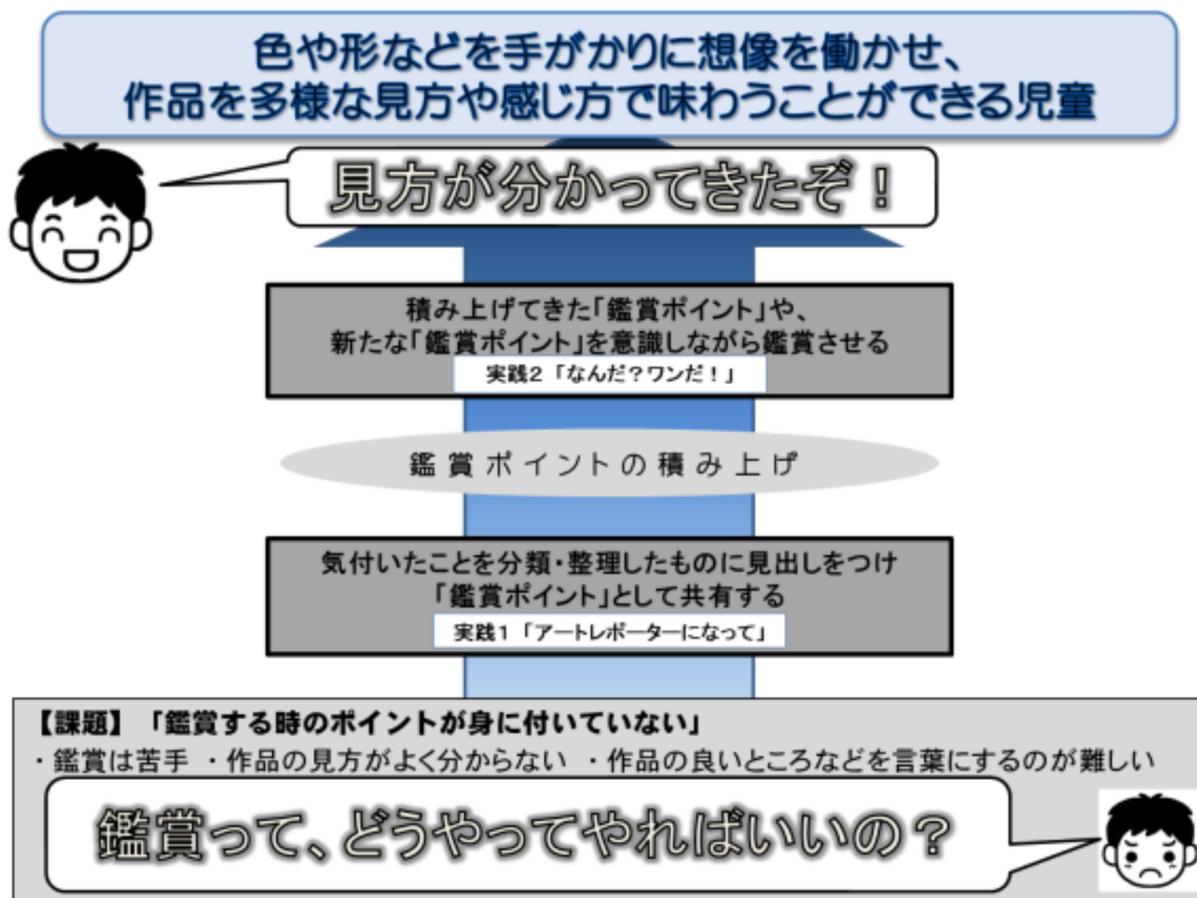
本校の児童の多くは、鑑賞する作品について大まかに捉えたり描かれているものについて言及したりすることができる。しかし、内容は表面的なものにとどまり、作品の細部に目を向けながら作品を十分味わっている児童は少ない。それは鑑賞の際、どのようなことを手掛かりとして作品を見れば良いのかが分からずに、漠然と作品を見ているからだと考えられる。

このような児童の態度を、鑑賞の際に自分なりの視点をもって意識的に作品を見ることへと転換させていくことが必要であり、そのためには、形や色などの造形的な特徴を視点として作品を味わうこと、どのような視点で作品の特徴を捉えたかを自覚することが大切であるとする。

そこで、造形的な特徴に目を向けられるようにし、併せてそのことを「鑑賞ポイント」として自覚できるような働きかけを重視していくこととし、上記のとおりテーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1) 題材「アートレポーターになって」(「風神雷神図屏風」の鑑賞) 6年生

「風神雷神図屏風」を鑑賞し、気付いたことなどを付箋紙に書き、それをグループで発表・共有化する。さらに、内容ごとに付箋紙を分類・整理し見出しを付けることで、作品に対する情報量を増やすとともに見出しを鑑賞の視点として意識付けるために、以下のような手立てを取り入れ、実践を試みた。

①グループ内発表で各自の感想などを共有し、それを分類・整理して見出しを付ける場の設定

付箋紙に書いたことをグループ内で発表し合うことで、作品の情報や友達が作品のどこに注目しているのかを知ることができる。さらに、グループで出した意見を内容ごとに分類・整理したものに見出しを付けることで、どういった視点で作品を鑑賞すると良いのかということに気付くことができると考えた。

②見出しを鑑賞の視点と考え、それを「鑑賞ポイント」としてクラス全体で共有する場の設定

鑑賞の際、児童が付けた見出しを「鑑賞ポイント」という鑑賞の手掛かりとさせることで、その後の鑑賞が漠然と作品を見るのではなく鑑賞の視点を意識した活動に転換していくと考えた。

(2) 題材「なんだ？ワンだ！」(「百犬図」の鑑賞) 6年生

実践1から継続的に積み上げてきた「色」や「持ち物」「ポーズ」といった細部に着目した「鑑賞ポイント」に「周りとの関係」といった視点の広がりを加える。このことにより、複数の視点を意識しながら作品を鑑賞し、作品に描かれていることを基に自分なりに解釈をして作品を味わうことができるようにするため、以下のような手立てを取り入れ、実践を試みた。

①選んだ1匹の犬のせりふを想像して書かせ、何を「鑑賞ポイント」として想像したのかの問い掛け

犬のせりふを想像する際に、「鑑賞ポイント」を意識できるように、根拠と「鑑賞ポイント」を繰り返し問いかける。このことにより、児童に鑑賞の視点が定着していくと考えた。さらに、細部に注目しつつ犬同士の間を想像することで、犬と同化しながら描かれている世界を味わう活動になると考えた。

②「周りとの関係」を意識しながら、犬のせりふを考える活動の設定

これまで積み上げてきた「鑑賞ポイント」に「周りとの関係」を加えることで作品に対する児童の作品の見方が広がり、作品を多様な見方で鑑賞することにつながると考えた。

③隣同士で自分の書いたせりふとそのせりふにした根拠を説明し合う活動の設定

せりふについて隣の児童と説明し合うことで、自分と同じ視点に着目していることに共感したり自分とは違う視点に気付いたりして、作品を多様な見方や感じ方で味わう活動になると考えた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

継続的に鑑賞活動を行いながら、視点となる「鑑賞ポイント」を積み上げ、教師の投げ掛けや話し合い活動、発表などで繰り返し「鑑賞ポイント」に触れて作品と向き合うことで、児童が自然に視点を意識した鑑賞活動に取り組めるようになってきた。また、積み上げてきた鑑賞ポイントを自分で選択して鑑賞するとともに、多様な視点を根拠とした作品の見方が身に付いてきた。

2 課題

単に作品の表面的な読み取りになってしまう部分もあったので、作品とじっくり向かい合い、様々な感じ方で作品に対する意見や考えを持つために、作品と向かい合う時間設定の工夫や鑑賞ポイントを提示する方法やタイミングなどの工夫をする必要がある。

3 提言

以上から、計画的・継続的に鑑賞ポイントの定着を図り、鑑賞の視点を意識させることが、多様な見方や感じ方で作品を豊かに味わう上で有効であるということが分かった。そのために、どのような活動をすれば児童に鑑賞の視点が定着し、視点を意識するようになるかを工夫することが重要なことである。

<授業実践>

実践 1

- 1 題材名 「アートレポーターになって」 (第6学年・1学期)
作品名 「風神雷神図屏風」(俵屋宗達 作)

2 本題材及び本時について

本題材は、俵屋宗達作「風神雷神図屏風」(図1)を対象とし、描かれているものや表されていることなどについて考え、それを基にレポート文を書くものである。まず作品に描かれているものや使われている色、登場人物のポーズなどに着目し、気付いたことや分かったことなどを分類・整理し、それを短い言葉で表したものを鑑賞の

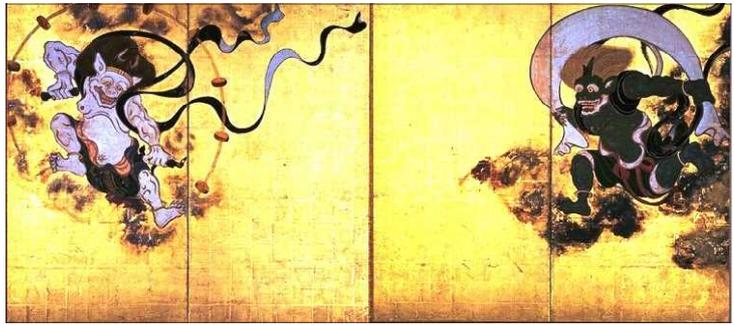


図1 風神雷神図屏風

視点として意識させる。その上で作品を見直し、レポート文を書く。これらの活動を通して自分なりの視点で作品を味わうことをねらいとしている。本題材ではこのねらいに併せ、鑑賞を行う上で必要な視点に意識を向け、それを鑑賞ポイントとして確立することを重視し、次のような手立てを具体化した。

— 本時の研究上の手だて —

- グループ内発表で各自の感想などを共有し、それを分類・整理して見出しを付ける場の設定
- 見出しを鑑賞の視点と考え、それを「鑑賞ポイント」としてクラス全体で共有する場の設定

3 授業の実際

【課題】「風神雷神図」のレポート文を書くための取材をしよう。

最終的にレポート文を書くために作品について考える活動を「取材」とし、児童が興味・関心を持てるようにした。レポート文を書くためには、細かい部分までよく見たり描かれているものについて自分なりに考えを持ったりすることが必要となる。しかし、児童はまだ鑑賞の視点という意識がないため、後の分類しやすさを考え、まず「風神雷神図屏風」全体を「風神」「雷神」「その他」の三つに大まかに分け、それぞれについて分かったことや気付いたこと、疑問に思ったこと、不思議に感じたことなどを付箋紙に書くよう投げ掛けた。授業の流れは以下のとおりである。

(1) 第1時

- a 掲示された「風神雷神図屏風」の図版を見て、作品に描かれているものについて大まかにつかみ、気付いたことなどを付箋紙に書く。
- b 付箋紙に書いたことをグループ内で発表し合う。
- c 貼った付箋紙を、書いてある内容で分類・整理し、話し合っで見出しを付け、「鑑賞ポイント」としてクラス全体で発表し合う(研究上の手立て)。

(2) 第2時

- d グループ内で風神または雷神のうち一つを分担して、共有したことを基にレポート文を書く。
- e レポート文をグループの中で発表し合い、良かったところや改善点などについて話し合い、それを基にレポート文を修正する。
- f 修正したレポート文の発表会をする。

児童は、第1時に「風神雷神図屏風」を鑑賞し、それぞれが気付いたことや感想などについて付箋紙に書き込んでいた。個人差はあるが、どの児童も複数枚の付箋紙に記入することができた。その後、グループ内での発表では、付箋紙に書いたことについて活発に意見交換をする様子が見られた。以下は、グループ内で出された意見を分類・整理し、見出しを付けている様子である。

(1)第1時-c 付箋紙に書いてある内容について見出しを付けている様子

T : 付箋紙に書いたことを似た内容でまとめて、それぞれに見出しを付けてみましょう。

S 1 : バックはほとんどが黄色(金色)が多い。

S 2 : 雷神の体は白っぽいね。

S 3 : 風神は緑っぽいよ。

T : たくさんの色に気が付いたね。

S 1 : いろいろな場所の色に注目するといいたね。

S 3 : 雷神が持っているのは、太鼓のばちだよ。

S 4 : 風神は布みたいなものを持っているんじゃないのかな。

S 1 : これは「持ち物」でまとめられるね。

S 6 : 風神と雷神が手足にリングを付けている。

S 7 : 私も同じところに気が付いた。服は同じものを着てるよ。

S 8 : 本当だ、同じ格好だね。「身につけている物」でまとめよう。

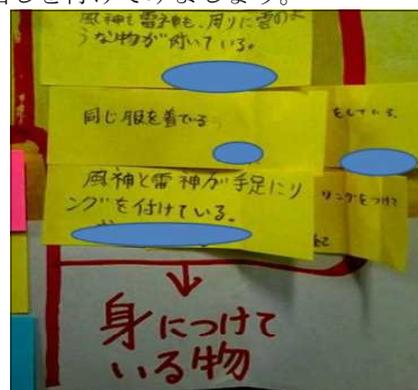


図2 「身につけている物」の見出しを付けた付箋紙

このようにそれぞれの気づきをグループ全体に共有し、分類・整理して見出しを付けたことにより、新たな見方に気付いたり自分がどのような視点で見ていたのかを意識化したりすることができた。学級全体では「想像」「見た目」「体の特徴」「持ち方」「細かさ」などを見出しとしてまとめることができた。

この後、鑑賞するときにはどういった視点を意識すると良いかと全体に投げ掛け。その結果、「色」「ポーズ」「持ち物」「身につけている物」が良いのではないかとすることでまとまった。そこで、それらを「鑑賞ポイント」としていこうということを確認し、今後は、さらに「鑑賞ポイント」を増やしていこうと投げ掛けた。

児童は第2時で「風神」か「雷神」(両方も可とした)について、「鑑賞ポイント」である「ポーズ」や「持ち物」などを文章中に反映させたレポート文を書くことができた。以下は、レポート文の一部である。なお、() は意識した「鑑賞ポイント」を示した。

- いま風神は、もくもくとした黒い雲に乗っています！肌は緑色でこわい顔をしています！（色）
- どちらも帯を持ち、それで戦うようです！まわりもだんだん金色になってきました。（持ち物、色）
- 体が白く、両腕のばちで雷鼓をたたいて雷を鳴らしている雷神が現れました。左手の関節がおかしくなるほど、力みすぎています。（色、持ち物、ポーズ）
- 大きな風袋を持っていて、今にも大きな風が吹きそうです。（持ち物）
- 雷神は動物みたいですが、あのばちで雷鼓をたたくと雷が落ちます。（持ち物）

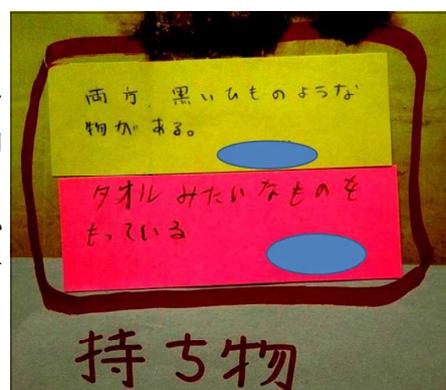


図3 「持ち物」の見出しを付けた付箋紙

4 考察

- 第1時の初めの、気付いたことや分かったことなど、様々なことをたくさん付箋紙に書く活動では、自分の考えを数多く言葉に表すことができ、能動的に作品に関わることができた。
- 付箋紙に書いたことをグループ内で発表し合ったことは、班のメンバーの意見を聞きながら、自分と同じ考えに共感したり自分では気付かなかった作品に描かれている特徴に感心したりしながら情報を共有することで、作品の理解が深まったり作品の見方について気付いたりすることにつながった。
- 「風神雷神図屏風」を選んだことは、鑑賞の視点を意識していない状態で取り組む題材として、「風神」「雷神」「背景」の大きく3点に対象が限られるという点で有効であった。
- 児童が「鑑賞ポイント」を意識しながら鑑賞活動をするためには、繰り返し「鑑賞ポイント」を意識させる活動をしながらか「鑑賞ポイント」を積み上げていく必要がある。しかし、授業時数には限りがあるため、鑑賞の形態や「鑑賞ポイント」の提示などを工夫しながら「鑑賞ポイント」を児童が意識できるようにしていかななくてはならない。

実践 2

- 1 題材名 「なんだ？ワンだ！」 (第6学年・2学期)
作品名 「百犬図」(伊藤若冲 作)

2 本題材及び本時について

本題材は、伊藤若冲作「百犬図」(図4)を対象とした鑑賞単独教材である。部分とその周辺に表されているものの関係を踏まえ、絵に表されている場面の状況を想像しながら美術作品を味わうことをねらいとしており、犬の立場になってせりふを書く活動を柱として進めていく。作品中に描かれているたくさんの犬の中から一匹の犬に絞って造形的な特徴を捉え、さらに、周りの犬へと視野を広げ、絵に表された状況を自分なりに想像するものである。本題材では、これまでの学習で積み上げてきた「鑑賞ポイント」に加え、細部を意識しながら周囲にも目を向けて鑑賞することを重視し、「周りとの関係」を新たな「鑑賞ポイント」として次のように手立てを具体化した。

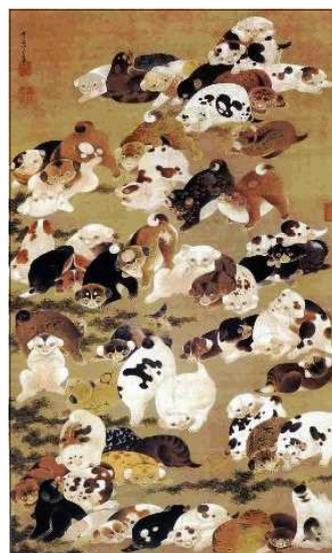


図4 百犬図

— 本時の研究上の手立て —

- 選んだ1匹の犬のせりふを想像して書かせ、何を「鑑賞ポイント」として想像したのかの問い掛け
- 「周りとの関係」を意識しながら、犬のせりふを考える活動の設定
- 隣同士で自分の描いたせりふとそのせりふにした根拠を説明し合う活動の設定

3 授業の実際

課題】「百犬図」で気になる犬を見つけ、どんなことが起きているか想像しよう。

たくさん描かれている子犬の中から自分が気になる一匹を見付けようと投げかければ、これまで積み上げてきた「鑑賞ポイント」を意識しながら「百犬図」を見るのが予想できたため、犬の立場になってせりふを書く際には、児童が想像したせりふとどのように想像した根拠について尋ねることを重視した。すると、すべての児童が「ポーズ」や「表情」など「鑑賞ポイント」を根拠としてせりふを書いたと答えることができた。また、クラスの半数が周りの犬に話したり周りの犬に影響を受けて考えたりしたせりふになっていた。そこで、新たな「鑑賞ポイント」として「周りとの関係」を意識しながら、改めてせりふを考えてみることや初めに選んだ犬から周りに考えを広げてせりふを考えていくことを提案した。

本実践では、活動に対し積極的に取り組むものの、落ち着いて物事を考えたり深く思考したりすることを苦手とするSを抽出児とした。

「周りとの関係」を意識して鑑賞し直し、せりふを想像する際のやりとり (下線部は着目した発言)

- T: 「周りとの関係」を考えながら改めて百犬図を見直し、初めに選んだ犬の周りにはいる犬のせりふを書いてみましょう。
- Sは初めに「アッカンベー」から「痛って一べろかんだーどうかなってる？」へと書き直してから、その周りの犬のせりふを想像し付け足していった。
- T: これは、どうして書き直したの？
- S: べろを周りの犬に見せてるみたいに思ったから。
- T: どうしてそう思ったの？
- S: べろを出して上の犬の方を向いてるでしょ。だからだよ。
- T: どうして二つ目のせりふは「血でてるー！」にしたの？
- S: べろを出してる犬の方を見てるっぽいから。
- T: 目を見て分かったんだね。鑑賞ポイントは？
- S: 「向き」です。
- T: なるほど、目の「向き」を見て、周りの犬との関係が分かったんだね。

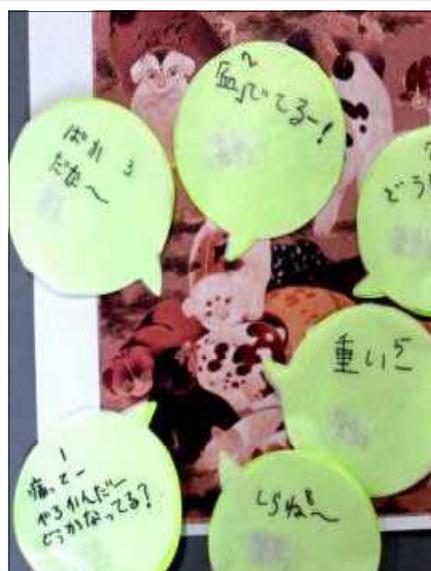


図5 周りの犬を意識したせりふ

Sは発問の意図を正しく捉え、初めに書いた「アッカンベー」のせりふも「周りとの関係」という視点から書き直していた。その後も「周りとの関係」や「ポーズ」「表情」「向き」「部分」「表現」を視点に周りの犬のせりふを考え、ベロをかんでしまった犬と周りの犬たちとのやりとりの様子が想像できていることが分かった。なお、22名全ての児童が「周りとの関係」を意識してせりふを書いており、授業前半での11名から倍増した。つまり、全員が新たな「鑑賞ポイント」を意識しながら鑑賞したのである。

その後、周りのせりふを書いてから隣同士で説明することを事前に知らせておいた。そうすることでせりふの根拠となる「鑑賞ポイント」をより意識でき、また、相手の視点と自分の視点を比べ、共感したり違いに気付いたりしながら、多様な見方ができるようになるのではないかと考えた。

書いたせりふについて隣同士で説明し合った後で、相手の図版にせりふを付け加えている様子

T：隣の人に説明してもらった状況の中に自分が犬になって入ったとしたら、どんなせりふを言うか付箋紙に書いて、相手の図版に貼ってください。

I：けんかしてる2匹を周りの犬が止めようとしてると考えた。

S：どうしてけんかだと思った？

I：この2匹も、周りの犬も楽しそうな顔してないから。

S：ああ、なるほど。

T：今、どうして「なるほど」ってなったの？

S：確かに2匹も、周りの犬も表情を見ると楽しそうじゃないなと思ったから。

T：ちゃんと「鑑賞ポイント」が意識できてるね。

その後Sは、隣の席のIの状況説明を受けた後で「何でけんかー？」と書いて貼った。

T：どうしてこういうせりふにしたの？

S：周りのけんかをとめようとしている犬と一緒に、けんかをとめようと思ったから。



図6 隣の児童の説明を理解しながら、周りの犬を意識したせりふ

このようにSは、隣の児童の図版に貼ってある付箋紙とその説明から状況を正しく捉え、その説明や状況に整合したせりふを付け加えることができた。

4 考察

- 単に意見や感想を考えるのではなく、せりふを考える活動や、友達同士で説明し合い、相手の考えを踏まえて友達の図版にせりふを付け加える活動を設定したことは、描かれている造形的な特徴に着目したり自分では気付かなかった作品の捉え方や面白さなどに気付いたりする上で有効であった。
- 選んだ犬が言うだろうと考えるせりふを付箋紙に書く場面や周りとの関係を意識してせりふを書く場面では、多くの児童が「鑑賞ポイント」を作品を味わう手掛かりとして活用していたことから、児童の中に「鑑賞ポイント」を意識しながら活動に取り組む姿勢が身に付いてきたといえる。
- 「百犬図」は多様な姿の犬が登場していることから、これまで積み上げてきた「鑑賞ポイント」を意識しながら作品に描かれている状況を想像する活動において有効な題材であった。
- せりふという形で、犬と同化しながら楽しく考えを書くことができたが、逆にせりふという形に縛られてしまい、考えが狭められてしまった面もあった。
- それぞれの活動内容や、児童の取組は良かったが、初めに絵と出会って自由に鑑賞させる時間や隣同士で説明や意見交流しながらせりふを考える時間、全体でせりふやそれぞれが捉えた関係性などを共通理解する時間を十分確保できると良かった。そういった意味で、題材に充てる時間を1時間と2時間のどちらにするかを検討していく必要がある。